

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等政策研究事業（難治性疾患政策研究事業）
プリオン病及び遅発性ウイルス感染症に関する調査研究班 分担研究報告書

亜急性硬化性全脳炎患者に関する疫学調査サーベイランス 2018

研究分担者：岡 明 東京大学大学院医学系研究科小児科学
研究分担者：鈴木保宏 大阪母子医療センター小児神経科
研究分担者：遠藤文香 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科発達神経病態学
研究協力者：竹中 暁 東京大学大学院医学系研究科小児科学

研究要旨 亜急性硬化性全脳炎(SSPE)患者に関する疫学調査として、全国の神経内科および小児神経の医療機関を対象に、郵送によるサーベイランス調査を実施した。一次調査では患者数と新規発症患者の調査を行ったが、把握することができた全国の患者総数は66名で、本研究班による過去の調査結果と比較して漸減傾向にあることが示された。一方で患者の平均年齢は29歳であり、罹病期間の長期化と、平均年齢の上昇が認められた。新規発症については、2012年以降の新規発症は7名であり、依然としてSSPEの発症が持続している状況であった。今後二次調査にて、さらに詳細な調査を依頼中であり次年度に解析予定である。

A. 研究目的

我が国は平成19年に国は麻疹排除計画を策定し、予防接種対策などの予防事業を進めてきており、平成21年以降は麻疹の総数は激減し、国内での水平感染による新規発症はほぼ抑制された状況となっている。現在の発生例は海外からの持ち込みによる麻疹であり、海外での麻疹の増加が報告されており、それに対する警戒が引き続き必要な状況となっている。

麻疹は急性期の麻疹症状の後に持続感染をきたし、重篤な神経後遺症として慢性期に亜急性硬化性全脳炎(SSPE)を発症する。SSPEの発症は、約10年間の潜伏期間の後であり、麻疹がほぼ撲滅された我が国では、新規発生例は減少しているものの、今後も当分の間はSSPEの発症は続くものと想定される。

現在、我が国の麻疹撲滅対策の一環として麻疹については全数調査対象となり、発症数が把握されている。一方で、重症後遺症であるSSPEについては報告制度はない。小児慢性特定疾病事業や特定疾患治療研究事業の対象となっている。小児慢性特定疾病事業では、医療費の公費負担されている年齢では制度の利用がされていない場合もあり、必ずしも現状では実態を把握するには最適であるとは言えず、全国的なデータを得られる環境にはない。

本研究班では平成19年と平成24年に全国の神経内科および小児神経の医療機関を対象に、郵送によるSSPE患者の実態調査を実施した。これは厚生労働行政などに役立てる基礎資料として、SSPE患者数の把握と、特に麻疹自体が減少している現状での新規発生数の把握と、患者の生活実態の調査を目的とした。

今回そのフォローアップとして平成29年度に全国調査を実施した。

B. 研究方法

平成29年度に郵送にて質問紙を送付し、はがきに記入の上回答を求めるサーベイランス調査を実施した。回答率を上げるために、患者数と新規発症患者を把握に質問内容を限定し、一次調査を行った。

【調査概要】一次調査では、診療中の患者数、性別、年齢、前回調査を行った平成24年以降の発症者数を調査した。また、診療中の患者がいた場合については、二次調査の可否の回答を依頼した。

【調査対象】全国の小児科小児神経科医療機関および神経内科医療機関の合計1595施設に一次調査票を送付した。

(倫理面への配慮)

東京大学医学系研究科研究倫理委員会で承認を得て実施した。

C. 研究結果

【回答状況】平成 31 年 3 月現在、1036 施設 (65%) より回答があった。前回調査の回答率が 60.9% であり、ほぼ前回と同様の回答を得ることができた。

【患者数】現時点で診療中の患者総数は 66 名の患者の報告が得られた。

地域別では、下記の通りであった。

表 1 地域別患者数

地域	回答患者数
北海道	9
東北	6
関東	13
中部	10
近畿	6
中国	3
四国	4
九州	15
全国 合計	66

【患者平均年齢】患者の調査時年齢は 15 歳から 48 歳で、平均年齢 29 歳であった。(図 1)

【新規発症例】2012 年以降の発症者数として報告されたのは 7 名であった。調査時年齢は 15 歳から 31 歳であった。仮に 2013 年発症としても発症年齢は少なくとも 2 名は成人期発症と考えられる。

【新規発症例地域分布】新規発症者の報告は特に関東が 5 名と多かった。

地域	新規発症者
北海道	0
東北	1
関東	5
中部	0
近畿	0
中国	0
四国	0
九州	1
全国 合計	7

D. 考察

平成 24 年の本研究班の調査と同様に、全国

のサーベイランス調査を神経疾患の成人および小児の専門診療科に対して郵送での調査を行った。65% の回答を得ることができた。

把握することができた患者数は 66 名で、前回の調査結果 81 名と比較してやや減少をしていた。過去の調査結果と比較しても、調査方法は異なるが 1990 年の 151 名 (二瓶等)、2003 年の 125 名 (中村等)、さらに今回と基本的に同じ方法での本研究班での調査である 2007 年の 118 名 (細矢等) と比較して漸減傾向にあると考えられた。

調査時の年齢については、調査とともに平均年齢が上昇している傾向が認められた。

本研究班調査	平均年齢 (分布)
サーベイランス 2007	21 歳 (4~39 歳)
サーベイランス 2012	24 歳 (10~48 歳)
今回	29 歳 (15~48 歳)

前回の調査以降の発症者について回答を求めたところ 7 名の新規発症者の報告が得られた。2012 年以降も、新規発症がまだ持続していることがうかがわれた。注目すべき点として、調査時の年齢は 15 歳から 31 歳であり、SSPE の発症年齢としては高い傾向にあり、乳幼児期の麻疹罹患後とすると 1990 年代を中心とした麻疹罹患に引き続く SSPE の発症と想定された。新規発症の 7 名のうち 5 名が関東の医療施設からの報告であり、今後二次調査で一次麻疹の罹患時の状況などについて調査する必要がある。

本研究班での 2012 年のサーベイランス調査では、2007 年の調査以降の発症例数を質問し、15 例が報告されている。6 年間で 7 名の新規発症であり、新規発症は年間 1 名程度と漸減傾向にあった。

E. 結論

SSPE 患者について全国調査を実施した。

把握された患者総数は 66 名で、過去の調査結果と比較して漸減傾向にあることが示された。

患者の平均年齢は 29 歳であり、罹病期間の長期化と、平均年齢の上昇が認められた。

2012 年以降の新規発症は 7 名と報告され、依然として SSPE の発症が持続している状況であった。今後二次調査にて、現在の状況などにつ

いてさらに詳細な調査を依頼中で次年度に解析予定である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む。)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

図 1 調査時の患者年齢

